

学位請求論文審査報告書

氏 名 ARILDII BURMAA (ア Ril ディー・ボルマー)

論文題目 モンゴルにおけるチベット仏教受容の一形態

—モンゴル語訳『菩提道次第大論』と『正字法・賢者の源』を中心として—

審査委員 主査 大谷大学教授 福 田 洋 一

副査 大谷大学教授 箕 浦 暁 雄

博士 (文学) [大谷大学]

副査 大谷大学教授 松 川 節

博士 (文学) [大阪大学]

副査 東京大学講師 西 沢 史 仁

博士 (文学) [東京大学]

I. 論文内容の要旨

本論文は、チベット仏教における最も有名な論書であるツォンカパ著『菩提道次第大論』のモンゴル語訳の経緯、および、チベット語仏典をモンゴル語に翻訳する際の原則と対照語彙を規定した『賢者の源』の内容を検討することによって、チベット仏教がモンゴルに受容されていった経緯の一端を研究したものである。本論文の構成は以下の通りである。

序論

第1章 『菩提道次第大論』のモンゴル語訳の種類、年代、訳者、流布の実態

第2章 モンゴル語訳『ツォンカパ全集』の二つの版

第3章 チャンキヤ著『正字法・賢者の源』の特徴 —『二卷本訳語釈』との比較を通じて—

第4章 欽定蔵蒙訳語集『賢者の源』の訳語の有効性 —『菩提道次第大論』と『入菩薩行論』の訳語を中心として—

結論

今後の課題

第1章では、『菩提道次第大論』のモンゴル語訳諸本の文献学的な研究を行った。同書モンゴル語訳は数回試みられているが、それらの訳者、翻訳年代に関する研究はこれまで存在しなかった。著者は、現在調べられる限りの『菩提道次第大論』のモンゴル語訳を調査し、奥書やその他

の歴史文献に基づき、それぞれの訳者および翻訳年代を確定ないし推定した。奥書を持たないため訳者を確定することができない写本や木版については、現在参照できるすべてのモンゴル語訳の帰敬偈を比較し、翻訳の影響関係などを考察して、時間的な前後関係を推定した。その結果、以下の7種モンゴル語訳『菩提道次第大論』の存在とその順序を確定することができた。

- (1) アルタンゲレル (Mong. Altan gerel) 訳 (1655)
- (2) ダギ (Mong. Daki) 訳 (1662-1670)
- (3) クンガギャムツォ (Mong. Kün dga' rgya mtsho) 訳 (17世紀後半)
- (4) 『ツォンカパ全集』所収の訳 (1730年後半)
- (5) ロサンツェンペル (Mong. Lubsangčempil, 1761-1834) 訳 (1812)
- (6) ガルサンジャンバ (Mong. Галсанжамба, 1816-18??) 訳 (1870)
- (7) ボルガン (Mong. Булган, 1959～) 訳 (2004-2007)

第2章では、現存する二つの『ツォンカパ全集』の文献学的研究を行った。二つの全集とも18世紀前半に相次いで成立している。一つは1730年代後半に開版された黒字の全集であり、もう一つは1749年に開版されたモンゴル語訳北京版テンギェルに附属している赤字の『ツォンカパ全集』である。このうち、全巻が揃っているのは前者であり、後者は一部が確認されるにすぎない。ほぼ同じ時期に成立した、これら二つの版について、現存の状況や開版の事情、内容の異同に関する研究は存在しない。北京版テンギェル附属の赤字『ツォンカパ全集』は、京都大学の羽田記念館に所蔵されている八巻のみが現存している。一方、黒字の全集はいくつかの収蔵館を合わせると全巻を揃えることができる。その重なる部分および目録を比較すると、内容は同じものを改訂したものであることが判明した。これはもともとチベット語北京版テンギェルに附属の『ツォンカパ全集』を翻訳したものである。また、黒字『ツォンカパ全集』の中で翻訳年代が記載されている第5巻と第18巻の奥書に基づいて、同全集の成立年代を1730年代後半と推定した。

モンゴル語訳『ツォンカパ全集』の成立には、モンゴル語訳北京版テンギェルの編纂が関与している。その責任者であった国師チャンキヤ3世ルペードルジェは、乾隆帝の命によって、テンギェルのモンゴル語訳の訳語を統一するために翻訳規則と翻訳語彙を規定した『正字法・賢者の源』を著した。第3章では、この著作の成立の経緯、内容、チベット語の翻訳語彙集の伝統との関係について研究した。本書は、古代チベット王国における同種の文献『翻訳名義大集』や『二巻本訳語釈』と比較すると、それが論書部であるテンギェルの翻訳に特化された構成になっていることが分かる。同様にチャンキヤが属するゲルク派の寺院における教育システムの影響を受け

ていることも指摘した。一方、その執筆の目的や意図に関しては、古代チベット王国時代の上記二書と密接な関連があることを明らかにした。

第4章においては、テンギユルのモンゴル語訳を統一するという目的のために著作された『正字法・賢者の源』が、実際のモンゴル語訳テンギユルに反映されているかを検証した。同書の執筆時期は1742年であり、テンギユルの成立が1749年であることを考えると、実際には翻訳、あるいは校訂に利用されたとは考えづらい。それを正確に検証するためには、各論書に付け加えられているモンゴル語版の奥書を調査し、その翻訳や校訂の時期を特定し、さらにそれと『賢者の源』に規定される翻訳語彙が採用されているかどうかを検証する必要があるが、現在はそれを実行できる余裕がない。本章においては、ツォンカパ著『菩提道次第大論』にもっとも多く引用される『入菩薩行論』の元朝時代のモンゴル語訳と北京版テンギユルに収録される訳と『菩提道次第大論』に引用される同書のモンゴル語訳を比較し、『賢者の源』の訳語によって校訂されることなく、古い訳をそのまま踏襲していることが判明した。また、『ツォンカパ全集』所収の『菩提道次第大論』および、それ以降に翻訳されたと思われる二つの訳の訳語を『賢者の源』と比較した。取り上げた単語は少ないが、翻訳年代が新しくなるに従い、『賢者の源』の訳語が採用され、また訳語の統一が進んでいることが確認できた。『賢者の源』が浸透していくには時間がかかったことが推定される。これについても、より多くの術語について比較を試みる必要はあるが、それは今後の課題に残された。

本論文全体を通じて、チベット仏教がモンゴルに受容されていく過程のうち、論書のモンゴル語訳に焦点を当て、その文献学的、歴史的な研究を行い、これまで等閑に付されていた事実を数多く明らかにした。

II. 論文審査結果の要旨

本論文は、チベット仏教がモンゴルに受容される過程の一端を、チベット仏教を代表する名著ツォンカパ著『菩提道次第大論』のモンゴル語訳、およびモンゴル語訳の訳語統一のためにチャンキャ三世によって著された『正字法・賢者の源』の歴史的、文献学的研究を通じて、明らかにしたものである。

従来のモンゴル仏教の研究では、経典の翻訳、とりわけ古い時期の翻訳が注目されてきた。そのため論書のモンゴル語訳について系統的な研究には手が付けられていなかった。本論文はその欠を埋めるものである。

ツォンカパの『菩提道次第大論』には、著者によれば少なくとも7種類のモンゴル語訳が現存する。著者はそれらを各地の収蔵機関を訪問して実地検査を行った。場合によっては、現物を確認できず、その写真あるいは筆記ノートを参照するに留まったものもある。そのため奥書まで確認できなかったものもあるが、巻頭部分にある帰敬偈のモンゴル語訳については、全ての訳本のテキストを収集することができた。奥書が存在するものについては、そこから翻訳者と翻訳年代を割り出し、奥書が参照できなかったものについては、帰敬偈のモンゴル語訳を比較して相互の影響関係を調べる事によって、時間的な前後関係から翻訳年代を推定している。これまで、このような視点で『菩提道次第大論』のモンゴル語訳の全体像を整理した研究は存在しなかったため、本研究によって同書のモンゴル語訳の研究を行う基礎的な研究が整ったことは大いに評価できる成果である。

同様に、『菩提道次第大論』を含むモンゴル語訳『ツォンカパ全集』についても、その存在は断片的に知られてはいたが、総体として何がどこにどれだけ現存しているかを整理した研究は存在しなかった。著者の確認したところによれば、同全集はほぼ同時期に二つ開版された。一つは北京街版と呼ばれる通常の墨で刷られた全集であり、フフホトの内蒙古図書館とロシアのサンクトペテルスブルグ大学図書館とに、収蔵されている。両者とも欠本はあるが、両方を合わせれば全20巻を手にすることができる。もう一つの版は、乾隆帝が命じて開版したモンゴル語訳北京版テンギユルに附属する『ツォンカパ全集』である。これは他の北京版大蔵経と同様に赤字で刷られている。この『ツォンカパ全集』は従来、現存が確認されていなかったが、著者が京都大学附属の羽田記念館に8巻が現存していることを発見した。これらは目録にも収録されていないために、実際に同記念館を訪れて確認するまでは、その存在は知られていなかったものである。保存状態も悪いようで文字も薄れているとのことであり、早急な保存を必要とするが、本研究によりその道も開かれることが期待される。

著者は、これら二つの版の現存する巻および目録の比較から、北京版テンギユル附属の全集は、先行する黒字の北京街版の翻訳をそのまま彫り直したものと結論づけているが、この点については、目録や配列がほぼ一致するというだけで、訳文そのものの相違があるかどうかを比較しなければ、単なる解版であると結論づけることはできないと思われる。もともとこれらのモンゴル語訳全集の原本になったのは、北京版チベット語テンギユルに附属の『ツォンカパ全集』であるので、著作の配列や目録が一致するのは自然なことであるからである。少なくとも現存する巻について、訳文そのものの比較をもう少し丁寧に調査する必要があると思われる。とはいえ、黒字の

全集の成立年代が1730年代後半と推定され、また北京版テンギユルの成立が1749年であるので、ほぼ10年の違いしかなく、これだけの全集を別に訳出することはできなかつたであろうことは想像に難くないので、実質的に訳文も同じものであることはほぼ確実である。

このように著者の努力により、モンゴル語訳『ツォンカパ全集』について、何がどこにどれだけ現存し、その歴史的な成立年代が推定され、目録の複雑な関係が整理されたことは、モンゴル語訳『ツォンカパ全集』の研究の基礎を築いたという意味で高く評価できる本研究の成果であると言える。

本論文の後半は、モンゴル語訳北京版テンギユル成立に関係するチャンキヤ三世著『正字法・賢者の源』という翻訳語彙集の研究に充てられる。同書はチャンキヤによってチベット語で著された後、複数の翻訳者によってモンゴル語の翻訳されたものであり、これまで主にチベット仏教研究者によって研究が発表されてきた。ただし、概説的な紹介や、一部の章の翻訳、あるいは新訳と旧訳の本訳語の比較に関する章など、部分的な言及に留まっており、その全体としての特徴を指摘するものはなかった。著者は、モンゴル語訳北京版テンギユルの奥書や目録序文と、『賢者の源』自身の序文を付き合わせ、『賢者の源』の成立事情を明らかにした。さらに、同書がモデルにした古代チベット王国時代にサンスクリット語原典をチベット語に翻訳する際に作成された翻訳対照語彙集の『翻訳名義大集』およびその難語積とされる『二卷本訳語積』と比較し、その類似点（つまりモデルとして踏襲した点）と相違点（状況が異なっていた点）を整理した。そして『賢者の源』の特徴を時代的な状況の中に位置付けることに成功した。

同書は、古代チベット王国の場合と同様、訳語が不統一になっていることを憂いで皇帝（あるいは王）の勅命によって編纂されたものであり、古代チベット王国の偉業を清朝が踏襲していることを印象づける意味があった。それと同時に、仏教の理解が進んだ点、また経典ではなく論書の翻訳であることにより、その内容は仏教学の術語を体系的に位置付けるような構成になっている点を指摘した。その体系は、チャンキヤの属するゲルク派の僧院における教育システムを取り入れていることを明らかにした。

最後に、著者は『賢者の源』が翻訳語彙を統一するという当初の目的を果たしていたかどうかを検討する。なぜならば、同書は1742年成立、そしてモンゴル語訳北京版テンギユルは1749年成立で、その間に翻訳語彙を校訂するだけの時間がなかったことが予想されたからである。本章では、ツォンカパ著『菩提道次第大論』に最も多く引用されている『入菩薩行論』のモンゴル語訳と『菩提道次第大論』のモンゴル語訳を用いている。モンゴル語訳『入菩薩行論』は元朝時代

に翻訳されたもので、従来の研究も数多く、また写本も多く見つかっており、それらの異同も調べられている。さらにそれに加えて、著者は『菩提道次第大論』に引用されているテキストや、最近の訳も比較し、その訳語が『賢者の源』に依拠しているかどうかを検討した。その結果、モンゴル語訳北京版テンギェルに収録された訳文までは、訳語の統一も意識されず、『賢者の源』による校訂も経ずに古い訳が踏襲されてきたが、それ以降の翻訳になると『賢者の源』に基づく訳語の統一がなされるようになったことを明らかにした。このことから、やはり『賢者の源』の翻訳語彙による校訂はモンゴル語訳テンギェルの成立には間に合わなかったが、その後は徐々に『賢者の源』の翻訳語彙が浸透していった可能性が高いことを示している。

著者も最後に付け加えているように、このような研究は一つの著作から抽出されたいくつかの語彙のみの比較では不十分であり、より多くの文献での検証が要請されるが、従来、本論文のような視点での研究が全くなされてこなかったことを考えると、本論文の研究が開いた視点およびその成果は、今後のモンゴル仏教研究に大きな影響を与えるものと考えられる。

以上、本論文の成果についての評価を挙げてきた。これらの点については審査員一同異論のないところであったが、一方で、審査員がそれぞれの専門分野の視点から指摘したのは、過去の研究文献を十分に参照していないという点である。確かに、著者は新しい視点を提起し、数々の先進的な成果を収めてはいるが、そのことは過去の研究を看過していいということを意味しない。特に参照すべき基礎的な研究文献については言及し、その中に自らの研究を位置付ける必要がある。また文献の引用の仕方の不統一、原語の記入が欠けている箇所、留学生であることによる日本語の誤用など、細かな点での欠陥が指摘された。これらの欠陥の故に論文自体が評価されなくなると、折角の成果も学界に十分伝わらない可能性が出てくるので、その点については、今後の研究において十二分に注意していく必要があることが審査員一同の共通の意見であった。このような形式的な問題点はあるが、全体として本論文はモンゴル仏教研究に新しい視点を導入し、そのことによる数多くの成果を挙げたことは十分に評価に値する。

審査に必要とされる最終試験については、審査委員全員により 2021 年 1 月 22 日に試問を行った。その結果、審査委員一同一致して、ARILDII BURMAA に大谷大学博士（文学）の学位を授与することが適当と判断した。